

【レポート】

「なくそう！子どもの貧困」

子どもの貧困と向き合う

# 貧困家庭への アウトリーチ実践報告

学習支援の向こう側を目指して

団体名 : 特定非営利活動法人ビーンズふくしま

報告者 : 鈴木綾

## ～学習支援の向こう側を目指して～

### 1. ビーンズふくしまという団体について

1999年に、私たちは福島県内に初めてフリースクールを開設しました。現代社会の中で不利な状況にあり、社会的に孤立する青少年たちが、自らが望んで生きられる社会を目指し、オルタナティブ教育の提供や労働・福祉との繋がる支援を行っています。

具体的には、フリースクールや就労支援、青年期の仲間づくりの場の運営、相談事業、貧困世帯の子ども支援、福島第一原発事故災害で避難した、子どもの放課後サポート、同災害による県内外避難者サポート、子ども支援者養成事業等の事業を行っています。

### 2. ビーンズふくしまの設立背景と教育観（ある保護者の語りから）

ビーンズふくしまの設立は、地域で不登校の子を持つ保護者や地元大学の学生、研究者、広範な市民が、地域で不登校の子どもが学ぶ場を創りたいと、「福島にフリースクールを創る会」を結成し、子ども達を育む場に対する思いや願いを紡ぐ活動が原点となっています。

同会の保護者の一人は、自身の子どもの不登校になった当初の自身の子どもの関わりと、子どもの様子、その事から考えた事を以下の様に語っています。

「息子が不登校になった当初、毎朝、息子を無理やり車に乗せて学校へ送って行きました。息子は頭痛を訴えていたり、学校への行きしぶりをしていたのが、学校へ連れて行かないといけなと思って、車で連れて行く事を繰り返していました。そんなある日、その日も、息子を、車に乗せて学校へ連れて行きました。ふと後部座席の息子を見ると顔面蒼白で、声も出さずに涙を静かに流している息子の様子がありました。その息子を見た時に、このままでは息子が壊れてしまうと思い、そのまま連れ帰りました。」

息子に対して、登校してほしいとの願いと、もう彼の健康が限界にきている事に気が付いたとの話をしてくださいました。その後の事も語ってくれました。

「学校へ行かない事を認め、公園に連れて行ったり、息子と過ごす事をしていくと、息子は、元気になっていきました。後に彼が話すには、友人との関係で色々都合

ったんだと話しています。息子が元気になるにつれて、母子の関係だけではなく様々な事を経験する事を願う私自身と、息子を感じました。同世代の子どもや集団の中で、様々な経験をする事ができないかと思ったのです。そんな動機がありフリースクールを創る会に参加しました。」

現在もビーンズふくしまでは、子どもの在りのままと認める事、子どもが自身の教育環境を選択する事（学校でも家庭でも地域・フリースクール等でも、子どもが選択した場所が学び場）との考えがあります。言い換えれば、子どもは教育環境を与えられる客体ではなく、環境を選択する主体と考えます。

### 3. 不登校・若者支援から子どもの貧困と出会う

ビーンズふくしまの設立当初1999年当時は、あまり貧困と言う子どもを取り巻く環境に対して実感する事はありませんでした。子ども達と活動しているうちに、子どもの環境の過酷さを認識せざるを得ない状況を感じるようになりました。

ある中学生の子どもが、いつも俯き加減で過ごしていました。スタッフである僕に、「つらい」「死にたい」「居場所がない」との訴えがありました。どんな想いを抱いているのか詳しく聴くと、この子は「私には食卓がないの」と話してくれました。この子の状況は、母子家庭で母親は日中、派遣社員として仕事をして、夜も家計の為に居酒屋でアルバイトをしていました。子どもは妹と2人で、夕食は冷蔵庫にあるパンや惣菜などを食べて過ごす事が、ほぼ毎日だったそうです。朝食も同様でした。唯一お昼ご飯は、フリースクールでスタッフと一緒に創って食べていたので、それが唯一温かい食事を誰かと共にする機会だったそうです。後に家庭訪問をした時に、この子が食事をするテーブルを見ましたが、いつ訪問しても新聞や書類などが積み重なり食事をする場所がない実際に目にしました。そのテーブルの前の椅子に座り、猫の額のような隙間に牛乳を置き、やはりパンを食べている子どもの様子がありました。

また別の子どもの出会いがありました。平日日中、フリースクールの近くのコンビニに、よく立っている中学生と出会いました。声をかけると、不登校で居場所がないとの事でした。フリースクールの存在は、友人から聞いて知っていて仲間が居るのではと、近くで様子を伺っていたそうです。「良かったら遊びに来ない？」と声をかけると、自分の家は、貧乏なのでフリースクールの利用料を払えないから、中には入れないと言いました。「見学は無料だし、相談に乗れるかもしれないからどう？」と伝えると、そろそろとフリースクールに遊びに来てくれました。その子の家にも家庭訪問をしましたが、やはり困窮家庭でした。色々な方法を考えて、この子がフリースクールへ入学できるようにしました。他にも、利用料を払えない、もしくは利用期間

中に利用料を払えなくなる家庭が、少なくない状況が年々増えていきました。

#### 4. 貧困家庭の学校外教育機会づくり事業

活動の中で、出会う子どもたちの状況から子どもを取り巻く環境の中に貧困が、大きく影を落としている事を感じるようになりました。若者支援の現場でも、同じように貧困によって様々な機会から排除されてきた話を聴くと、何も不登校の子どもに限らず貧困状況が身近にあり、法人としても取り組む課題との認識にたちました。

国の取組や行政も貧困に関する仕組み等が出来始めた時期、福島県とも話合いの場を持ちました。生活保護家庭の子どもに対するプログラムを提案しました。プログラムの主眼は、アウトリーチを通じて生活保護家庭に対して学校外教育機会を提供する事と孤立する過程と地域の支援リソースを繋ぎ、家庭を支える仕組み残す事を目的にしました。背景にはプログラムの実施場所が福島市や郡山市といった、福島県の中の大きな街ではなく民間支援機関等の無い町村だった事にあります。そういった地域では、行政が実施する保健福祉サービス以外の支援は無い状態でした。支援リソースが少ないうえに、対象になる子ども達の居住地も点在していて、公共交通も不便な状況にあり、更に言えば対象家庭が生活保護受給家庭であるために、車の保持も無いために保護者の送り迎えも期待できないので、私たちが家庭に出向いていく家庭訪問（アウトリーチ）を行う事が必要でした。また、自治体からの委託事業との状態の中で、事業が継続されないリスクがある事を考えると、ビーンズふくしまが、子どもを支え続ける計画よりも、子どもが暮らす地域の支援機関が、彼ら彼女らのセーフティーネットになる事の方が、継続的な支援が届けられる事を考えアウトリーチから見えた、家庭の困りごとを、地域の支援リソースと繋ぐことを選択しました。この時点では子ども達とは、まだ出会っていませんでしたが支援の届きづらい地域に出向く上で、想定されるリスクを考えながらプログラムの設計を行いました。

#### 5. 実業高校へ進学への期待

プログラムの主眼を前記しましたが、行政からの一番の期待は貧困の連鎖を防ぐ事、その事を実現するために、子どもの学力をあげて県立の工業・商業高校等の実業高校へ進学させる事を目指してほしいと、初期の段階で話がありました。子ども達の手職をつけて、就職しやすい状況にする事が貧困の連鎖を断ち切る事だとの考えでした。

一方、支援に入ると予想はしていましたが、学力向上に取り組む環境に至るには、

ほど遠い状態が各家庭にありました。ある家は、ゴミ屋敷で食事や入浴なども出来る状況では無かったですし、勉強する場所もなかったです。彼ら彼女らを継続的に支える仕組みを地域で作るための地域支援チームを作る事が、本プログラムの大きな成果とする事を共有しました。

## 6. 支援チームと福祉インフラの強化

生活保護を受給する様々な家庭に対して、家庭訪問を通じたサポートを実施しました。同時に家庭訪問から見えてきた課題や家庭からのヘルプを、関係機関に届けケースカンファレンスを多数行いました。初年度は5ヶ月間で20回以上のカンファレンスを実施し、課題解決の為にケアプランを策定、実施、見直しを関係機関と協働で行いました。初めの内は、なかなか噛み合わなかったカンファレンスも回数を重ねる事により熱心になってくれる行政職員が現れたり、折り合わなかった話合いが通じる様になったりと、困難さの中にある家庭を真剣に見つめる事から、支援機関が立場を超えて、出来る事を探れるようになってきた実感があります。もちろん、理想通りにはいかない状況も多々ありましたし、それぞれの機関の都合が優先せざるを得ない状況の中で、支援対象者の状況が置き去りにされる場面もなかった訳ではありません。

しかし、そういったコンフリックも避けては通れない道のりだとも感じていました。それらの事を乗り越える事、支援機関同士も互いの理解を深める事が、各家庭を支える支援インフラを強化する事と考えていたので、各スタッフは根気強くカンファレンスを続けてくれました。

## 7. 自分の人生を悪くしたいと思う子どもと会った事が無い

余談になりますが、福島県で子ども支援を行っている先輩の言葉で、「自分の人生を本当に悪くしようと思っている子どもにあつた事がない。誰もが、自分の人生を良いものとしようと思っている。」

私は、家庭訪問を通じて、この言葉を良く思い出しました。様々な困難な状況の中にあっても、子ども達は大人より小なりの希望や夢を持っています。明日の食糧がないかもしれない状況にあっても将来の夢を持っています。私たち大人は、その思いを伸ばせる存分に挑戦できる環境を作る事が役割だと考えます。学力を伸ばし、就職に有利な状況を作るよりも、子どもの希望を育て、その挑戦を支える事と、その挑戦が出来る安全安心な状況を作る事が社会的な役割だと感じています。

当日は、具体的な支援実践事例のご紹介をさせていただきます。どうぞよろしくお願ひします。